

第33回夏期福音特別集会 第3回聖書講筵

どん底

——ルカ伝第18章8～17節——

伊東 1986年7月26日

小池辰雄

天と淵 「主よ！」の一言 どん底を天国に 全十二召団讃歌 幼児のごとくに 希望は上から 纜を断ちて

【ルカ18・8～17】

8 我なんじらに告ぐ、速やかに審き給わん。然ど人の子の来るとき地上に信仰を見んや。

9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに此の譬を言いたもう、¹⁰ 『一人のものを祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、ひとりには取税人なり。11 パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。12 我は一週のうち二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」¹³ 然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」¹⁴ われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

15 イエスの触り給わんことを望みて、人々嬰兒らを連れ来りしに、弟子たち之を見て禁めたれば、¹⁶ イエス幼児らを呼びよせて言い給う『幼児らの我に来るを許して止むな、神の国はかくのごとき者の国なり。17 われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼児のごとくに、神の国をうくる者ならずば、之に入るこゝと能わず』

●天と淵

このルカ伝の18章は『どん底』という題にしました。

8 我なんじらに告ぐ、速やかに審き給わん。然ど人の子の来るとき地上に信仰を見んや。

と。キリストは絶望しておられる。もう世の末をちゃんと見ている。今、20世紀はキリストが言われる御言の現実がいよいよ濃くなってきた。



9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに此の譬を言いたもう、¹⁰ 『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、¹¹ ひとりは取税人なり。パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。¹² 我は一週のうち二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」¹³ 然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」¹⁴ われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。

さきほど歌っていただいた讚美歌の中にも出てくる。十字架上の両側の盗賊。片一方は非常に傲慢で、もう片一方は心が砕けた。ここにおいても、パリサイと取税人が人間の種類を二つに分けている。パリサイ人はおのれを義とする。

「禍なるかな。偽善なる学者パリサイ人よ」

と、キリストがマタイ伝23章で七度たたみかけて、攻撃されているわけです。

私が無教会から出たのは、無教会がパリサイ的になったからです。己の信仰を義として、

「教会は、カトリックは」

と言って、他を批判している。

「形式はいらない」

とか何とか言って。では、無教会の内容はどうか。聖書の研究ばかりしている。女の人もギリシア語やヘブライ語を勉強する。私もそこでヘブライ語のクラスをもたされた。女の人でも25、26人いた。まあ、そんな過去もあります。我々の間にはエリートもヘッタレもない。大学の教授であろうと何であろうと、私はそんなことはひとつも鼻にかけていません。パウロがピリピ書で言っている。

「⁸ 然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡てのものを損せしが、之を塵芥のごとく思う。」

今までのものは塵芥だと。

9 これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを受け取る
ところの信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜る義を保ち、キリストに在るを認められ、¹⁰ キリストとその復活の力とを知り……」（ピリピ3:8）

パウロは、本当にキリストがアルファでオメガなんです。彼が「聖霊」と言おうが、「神」と言おうが、全部「キリスト」に集中している。

「自分はキリストの僕、キリストの囚人だ。それが本当の自由の世界だ」と、彼は言っている。



ニコラウス・クザーヌスという、宗教改革のちよつと前の人ですが、この人は非常に素晴らしい魂でしたが、あまり普段に知られていませんでした。この人が、これはラテン語ですけれども、

「ポインティゲンチア・オポデイトウルム」「反対するものの同一」ということを言った。

「反対の一致」

という。本当の真理はそういうところにあると。

私の著作集第八巻の和歌集に『天淵集』と書いたでしょ。天と淵ふち。大空の星と深淵です。

「天は淵に臨み、淵は天を呼ぶ。最も相隔たるもの、最も近し。いと高き所に住み給う聖者、深淵より呼ぶところの声に耳傾け、自ら救い主となりて下り給う（イザヤ57・15参照）。かかる神の恩寵に生くる者の歌集、名つけて天淵集と称う。」

パウロは自分のことを「罪びとの首かしら」と言いました。私も、召団讃歌のB17番にそのことを私の告白として歌いました。

「我は罪びとの首なり」(B17) (作詩1983年8月31日午前一時 歌調「あした浜辺を」)

(テモテ前書1・15、この歌は合唱すべきものに非ず、独りで歌う歌)

1 すべての人に 救いあれ！

然しかかあらざれば 如何にせん

罪びとらの 首かしらこそは

この身なれば パウロの如

2 主のみ声あり 「我れこそは

十字架に在りて 汝がために

罪びとらの 首となり

あがないたり 汝がすべてを」

この2節。キリストは私たち一人びとりのために罪びとの首になってくださった。十字架の姿はそれです。

3 主は知り給う いと深く

われは黙もだして 主にゆだね

見よ、キリスト 来たり給い

われを抱く エン・クリスト！

4 主に在りて 我れ十字架と

み霊の愛に 生くるなり

主のステイグマ わが身にあり

噫、主の愛 極きまわみ無けれ

5 主のみ光を 身に浴びて



主のみ力に 満たされぬ
 主と一如に 無者とされて
 主の身証あかしを 生きてし往かん

内村先生もあの戦場ヶ原で友人と語った、その一節にそのことを語られた。

●「主よ！」の一言

ルカ伝にもどります。

「己を義と信じ、他人を軽ろしむる者」、これがパリサイの精神で、パリサイ根性というのがそれです。人を見下す。すぐ人を批評する、どうだあだど。パリサイ人の祈りでは、

「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、またこの収

税人の如くならぬを感謝す」

と、他の人と比較している。比較宗教学なんてのがある。比較文学とか、いろいろある。学門の世界では比較もいいでしょう。信仰の世界では比較は禁物です。人格は比較してはいかん。それぞれ天下一品です。比較して

「自分の方がいい」

とあって神さまに感謝している。とんでもない話だ。そんなものは神さまのところまで響かない。

「特にこの収税人の如くならぬを感謝す。一週に断食をしています。十分の一の献

金をしています」

と。立派そうに見える。はたから見ると立派かも知れない。

「汝知りたもう」

と詩篇139篇にある。神さまは人の心をちゃんと知っていらっしやる。

「奢おごれる者久しからず」

という。

「人の心腸を見たもう万軍のエホバよ」

とエレミヤは祈った。ヨブ記の中にもある、

「誰か汝に耐え得んや」

と。ところが、収税人の方では、

「遙はるかに立ちて」

と。神殿の所なんかに行けない。遠くに立って、とても恐れおおくて行けないというわけだ。また、

「目を天に向くる事だにせず」

と、目を向けることもできなくて、平伏してしまっている。「遙かにたちて」とは孤独です、独りです。信仰の本当の世界は独りなんだ。パリサイ人みたく比較して、どうのこうの言



っているうちはダメなんだ。「パネルディスカッション」なんか、その問答の中で比較が出てくると、私はムツと来る。比較してどうの言っているのは、大喝したくなる。

比較ではない。どこの学校を出ようが出るまいが、どうだっていい。吉川英治なんかどこも出てやしない。自分のまことの偽らざる姿。偽りがないということが大事なんだ。私は「X」、説明できない男です。

それは、ただ、

「キリストさま！ 主さま！」

というこの一言です。祈りの一番簡単なのは、

「父よ！」

とキリストは言われた。私たちは「主よ」と言う。これで祈りの中は全部、その一言に尽きる。「主さま！」と叫ぶと同時に全身が主の中に入ってしまふ。本当ですよ、これは。のんきな現実ではないんだよな…（異言）…。

「この一晩があなた方を、一人びとりを変える」

と、さつき叫んだ。そのとおりです。私も変わります。神の前にはみな同じです。この世の、どうのこうの、境遇はどうの、学問がどうの、地位はどうの、そんなことは全部、問題でない。土方であろうが、大学教授であろうが、みんな同じことです。それを何かと比べて比較したり、違うものと思つたら、本当の福音の世界には入れない。福音の世界は、そんな隔ての世界ではない。分別の世界ではない。理屈の疑問の世界ではない。

そのことを、キリストはルカ伝の「収税人」において、或る時は「遊び女」において、福音を説き給う。

「この女のした事は全世界に伝わる」

と言われた、「ナルドの香油」の話もある。神の前には、私たちはみなどん底なんです。この下がない所に立っている、坐っている。そして、

「主よ、あわれみ給え。神よ、罪びとなる我を憐み給え」

と、全存在をもつてキリストに祈りかかるときに、もはやそこは天国である。深淵は即、大空になる。キリストは地上のたった3、4年の伝道で、黙示録の最後の世界を体現なされた。何を見ているかと。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネのこの福音書は、世界中にこの福音書に匹敵するものはない。どんなに仏教に深遠な哲理があろうともダメなんです。これにかなわない。キリストという方は大変なひとです。お釈迦さんは難行苦行をして最後に悟つて、80歳でどうのこうのというんでしょ。キリストは30歳の時にもう既に本当の世界を、蕭々たる烈々たる世界をそこに開示して、そこで往かれた。十字架を負つて、復活して、天界に往つて、聖霊を降して。大変なかたです。「キリスト教」ではない。ただ「キリスト」です。

私たちは本当にこれに圧倒される。聖書は驚嘆驚倒、圧倒されて読む本である。



「ここがどうだ、あそこがどうだ」

ではない。特に福音書はもの凄い。それに感嘆して叫んで書いているのが、パウロやヨハネやペテロなんです。ゲエテが

「聖書は万巻の書の中のただ一つの書である」

と言ったのは、そのわけです。

●どん底を天国に

遙かに立って頭を上げることもできないこの収税人が神に最も近い。比較を絶した世界なんです。

「神よ、主よ、罪びとなる我をあわれみ給え」

と。これは収税人の言葉ではない。私の言葉です。失われたる現実なんです。失われたる現実に、失われざる現実をキリストはたまわっている。どん底を天国にしてくださっている。何がどうなったっていいではないか。このキリストに在って生くる我を誰がどうすることができるか。

「誰か我に敵せんや」

と、詩篇27篇もそのことを叫んでいる。

「このキリストの愛から、誰か我々を奪うことができるか」

と、パウロはロマ書8章の終わりで絶叫している。皆さん、こんな凄い福音ですよ。ありがたくて、力が来てしようがない。

全無教会に対して私は独りで立っている。絶対に負けません。あれはパリサイだから。その点で残念ながら、内村先生も藤井先生も塚本先生も、使徒たちの次元からはズレていました。塚本先生が正直に告白したことを私は言ったでしょ。人間的な立派さではないんです。私は何も先生方をけなしているのではない。先生方はそれぞれの役割を充分に果たされました。しかし、福音の真理の世界は限りなく展開していく世界です。

「義とされる」

という言葉は、どうも躓きになる。

「キリストの義をたもう」

と私はここに書いた。

「我が義を汝に与う」

ということ。「我が義」というのが、またヘタすると観念になる。我という義、キリストは義人なんです。

「義の実質を、愛の実質をお前にやるぞ」

と。ということよ、

「私自身をお前にやるぞ」



ということですが。満月の月影は、たくさん草の露にそれぞれ満月として映る、宿る。田、毎の月がそうです。一人びとりに全的に宿ってください。これは霊界の神秘の現実です。祈り自身がもう既に神秘の世界です。

そうしたらば、いろいろな問題を持っていても、心配要らん。本当にキリストを生きとてごらん。相手が参るから。

「愛が足りないの何の」

と何を言うか。自分が本当にキリストを生きとてご覧なさい。相手は降参します。大丈夫です。

「誰がどう思っている、こう思っている」

とそんなことはどうでもいい。

●全十二召団讃歌

皆さんに「全十二召団讃歌」をお配りしました。これは私の信仰告白です。

「全十二召団讃歌」（作詩1986年4月19日 歌調 一高寮歌「アムール河の」）

1 駱駝らくだの毛織皮けおりの帯
蝗いなごと野蜜くち喰くつ人

2 ヨルダン川に現はれて
水の洗礼ほどせり

3 されども彼は宣のべ伝つう
「我より後に來たる者

4 旧おきき律法おきてを乗り超こえて
燃もゆる聖みたま霊たまのバプテスマみ！

5 預言者よイエス故里ふるさとに
聖み言ことばのままに歩あきける

6 キリストも故里には容ゆるれられない。いわゆる親しい人にはみな躓つかれる。
容いれられずしてガリラヤへ

7 キリスト・イエス叫よびたり
「時は満ちたり神の国

8 近づきたれば回帰せよ
神の福音身に受けよ

9 「信まげよ」とは言いわれない、「身に受けよ」と言う。神の国の実体なるキリストがいらつしやつ

たから、だから、神の国は近づいた。

「私わたしに帰かえつて來こい。神の福よき音おとず信しんなる私わたしを身みに受けろ」

10 ということです。結局、全部、実体はキリストですよ。

11 ガリラヤ湖畔を歩あみゆき
シモンとアンデレ見給みたまへば

12 「我われに従したがへ汝なんぢらを」
人ひとを漁ある者とせん

13 彼らは直ちに網を棄すつ
ヤコブとヨハネ相繼ついで

14 直ちにイエスに従したがへり
信ま即ま行まの福音しんごぞ

15 北の丘なるキリストの
大告白はモーセより

16 山上の垂訓すゝめのこと。

17 はるかに深ふかきみ霊たまなる
自由と愛の律法なり

18 神の憐あはれみキリストに
現まはれたれば身心しんしんの



9 苦しみ悩み癒されて 救はれし人数知れず
 生まれながらの我々は 我執の罪の罪びとよ
 人はのこらずエゴイスト この罪の世を如何にせん
 10 キリスト・イエスは自らを 羔このつじとなし十字架に
 義と愛の死を遂げ給ひ 我らの罪を贖へり
 11 かくて我らの罪の根は 根こそぎせられ無罪なり
 この無の根源現実ほ 過去現在も将来も
 12 この十字架の贖罪の 門をくぐりて投身せよ
 見よ眼前のこの牧場 緑の野べよ水の辺べよ
 詩篇23篇です。 み霊の光霊風よ
 13 この陽の光清き風 噫新生よ永遠の！

14 主の復活の生命なる 十字架により無者となり
 恵まれたるぞ汝今日 天国体となりたれば
 み霊を受けて無量なる 天国体となりたれば
 我々は地上において、既に本質的には天国体にされている。絶対恩寵の現実です。自分の信仰の度合いがどうだ、とそんなことではない。

15 キリスト・イエス無者なるぞ さればみ神と一如にて
 無即無限の現実を その言行に現はせり
 16 この罪の世はドラマなり 我ら自身もドラマなり
 されどみ霊の力こそ この劇中の力なり
 17 されど友らよ心せよ 十字架なくばサタン来て
 妬み争い惹ひき起こし 混乱みだれの渦うずに捲まき込めん
 十字架を抜きにして、霊的なんて言っていると危ないぞ、逆にサタンに捕らわれるぞと。
 18 十字架聖霊二焦点 無即無量の奥義なり
 エン・クリストの現実ぞ 祈り入りてぞ身につけん
 19 苦しみ悩み来らば来よ 逆にサタンに捕らわれるぞと。
 逆に増します。 み霊の力いや増して
 耐えて忍びて突き破り 逆に増します。 み霊に在りて進み往く
 20 エン・クリストの現実の 有難さをば味はひて
 主なるイエスと一如にて 福音よきおとずれを身証あかしせん
 21 使徒らを慕ほう兄弟姉妹よ 絶対次元の人として
 左顧右眄さしごうべんなく進み往け み霊の自由に生きよかし
 22 噫主の霊体慕はしや その血と肉を飲くらみ喰くひ
 永遠の生命を我は生き わが使命をば果たさなむ



ヨハネ伝6章。キリストの霊体を、「我を食らえ、我を飲め」とキリストは言われる。

23 人は各々賜はれる

使命に生くるあるのみぞ

神は自ら指揮者

大交響曲を奏で給う

24 噫人の世の混濁よ

20世紀の世紀末

核の兵器を如何にせん

爆発すれば世の終末!

25 平和の道は唯一つ

その源の平安を

神のみに平伏して

体受することあるのみぞ

26 かくて互いに恕し合ひ

愛の握手を交し合ひ

各民族の特性を

歎ひ合ひて謳はなむ

27 いざ十字架を荷なひつつ

我らは往かん世の旅路

傷つき倒れ起き上がる

み霊の力不屈なり

倒れても、大丈夫、起き上がれます。

28 聖霊の愛は歓喜の

源なれば相愛し

み霊の子らよ身証せよ

み国の現実を今日もまた

29 聖霊の愛は力あり

火よりも熱き愛なるぞ

十二召団身証せよ

一対一の伝道を

30 神の歴史の一環を

承はりて進み往け

聖国の栄光見ゆるかな

聖名讃へつつ進まなむ

これは「アムール川」という一高の寮歌の歌調で歌います。

●幼児のごとく

ルカ伝の18章の少し先の方にいきます。

15 イエスの触り給わんことを望みて、人々嬰兒らを連れ来りしに、弟子たち之を見て禁められたれば、16 イエス幼児らと呼ばよせて言い給う『幼児らの我に来るを許して止むな、神の国はかくのごとき者の国なり。17 われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼児のごとくに、神の国をうくる者ならずば、之に入るこ
と能わず』

この言葉です。幼児のごとくに神の国を受けとる者でなければ、身体で体受する者でなければ、入ることができない。「信ずる」とは書いてない。非常に具体的な言葉です。

「全存在で受けとれ。それでなければ入れないぞ」

と。幼児の心。これは収税人の碎けの心と同じです。あるがままに自分を本当に偽りなく

さらけだす。その幼児の心です。

さつきも、祈りのことがいろいろ出てました。

「神を畏れない裁判人も、しつこく言いに来ていた寡婦が面倒臭いから、余りうる



さいから、審いてやろうと。いわんや、神は夜昼呼ばれる民の願いを聞かないことがあるか、直ぐ聞くぞ」

というような、キリストの譬たとえというのは面白い。キリストはそういうことを遠慮なく仰る。キリストの譬に躓かないでください。

我々は、それは或る時はもの凄く集中して祈りましょう。1時間でも2時間でも3時間でも8時間でも。いろいろな場合があるでしょう。どれでも結構です、どれでもみんな本ものであれば。電車の中でもどこでも、本を読む時でも。いや、聖書を読んでいること自体がもう祈りなんだから。一番凄い祈りなんだ。

「聖書を読んで、それで祈りはおしまい」

というのが実は本当の読み方なんだ。読むことが直ちに祈りである。だから、特に祈りと言わなくても、我々の魂の呼吸が祈りであるということまで、本当に魂がいつてなくては。魂の呼吸だから。そして、或ることに集中して祈る。もちろん結構。祈りは、常にキリストの中に乗り込んで、いるんだから。乗り込んでキリストの懐の中で祈る。父の懐の中で祈っているキリストのように、私たちはキリストの懐の中で祈る。

「神—キリスト—我」

ということになる。これが祈りの場です。どこであろうと、パツと思いついたら、祈りの所です。

私は、無教会時代にはそういう祈りを知らなかったね。無教会には確かに祈りが足りなかった。みんな、祈りというと、立派な祈りをするんだよ。ダメだよ、立派な祈りなんてのは。整った祈りをする。祈りでもって、何か神学の展開みたいなことをやる。ごめんだよ、そんなのは。神さまはそんなものは聞きやしない。幼児の祈り、幼児の心の祈りが、これが通ずる。

あのワーズワースの「虹」の詩があるでしょ。

「The child is father of the Man.」

「子供は大人の父である」

と。ということとは、キリストの

「幼児の如くなれ」

というのは、「幼子を学べ」ということなんだ。ワーズワースはそんな気持ちがあったんでしょね。あの訳をちょっと読もうか（著作集第八巻『詩歌集』241頁）。

『虹』（レインボウ） ウォーヅウォース

わが胸は欣び躍る、

大空に虹をし見れば。

人生の曙あけに然しかりき、

成人の今も然しかりあり、



老年の暮も然かあれ。
 然らずばわれ死なまほし！
 幼児は成人の父ぞ。
 魂極る生涯の日々を
 結びてよ生来の虔心。

●希望は上から

こんなことを言ったらおかしいけれども、私のドイツ語の詩をドイツ人が読んで驚いた。

「とても、普通のドイツ人でもこんな詩は書けません。あなたは大変な人ですね。

他のドイツ人にぜひこれは紹介したい」

とそのドイツ人が言っていました。私は何も巧んで書いたのではない。迸って出てきた。とにかく、作られたものはダメなんで、ほとぼしるもの、本当の神さまの創造です。あなたの方、我々の業はそのような創造的な業で、ひとまねや作為的なものは皆ダメです。無作の作ということ。これはキリストに直結して、聖霊の息吹の中にいれば、おのずからそうなってしまうんですね。私はこの30節の詩を2時間か3時間で書いてしまったんだから。面白いね、キリストは。

「かくの如く祈れ。そんな長く祈るな」

と言って、短い主の祈りを紹介するかと思えば、

「しつこく、どこまでもしつこく祈れ」

と。それは無法の世界なんです。無法の法の世界なんです。定型はないんですよ。定型がないということは、彫刻や絵画の世界もそうだということを高村光太郎が言っている。本当の自在なものは、その時その時でもって千変万化して現れる。

「されど人の来るとき地上に信仰を見んや」(ルカ18・8)

という。もう、20世紀は、地上にはそれ自体としては望みはない。希望は上からやってくる。と申し上げているとおりで、終末的希望というものは上からやって来る。だから、

「いつ世の終わりが来ても、ハレルヤ万歳！」

と言えるだけの実存を、一日一生として、一日千年として生きていないとね。

「千年は一日の如く、千年は一日の如し」

という。何だか知らないけれども、聖書が楽しくなってきたでしょ。聖書が楽しくなってきたら本ものだ。

「これは読まないではられない」

と。福音書は破ってポケットに入れておきましょう。

「もうヨハネ伝は暗記しました」

なんて誰かこの中の青年がいつか言ってくれよ。やっつてごらん。お経を読むようにごんごん。



まあ、それは半分冗談ですけどれども。とにかく、そういうように身に付けてくださいよ。
「それはここに書いてあります」
なんてのではダメなんだ。

「私の胸の中にあります」
でなければ。とにかく、私は暗記がまずいからね——聖句の基調は入ってくるから——口に出すという、言うことに違ったりする。藤井先生のところでは聖書を暗記させられたとき、私は言うことに違うものだから、先生は半分笑っていたよ。創造するからね、こっちは（笑）。私には記憶細胞がないんだ。私の家内は、反対にももの凄く記憶細胞がある。よくできている。

● 纜を断ちて

この18章の終りの方にまた、富める青年のことが出ているが、これはマタイ伝にもマルコ伝にも出ているから、言いませんけれども。昨日のところにもありましたが、ちょっと18章29節を見てください。

「²⁹われ誠に汝らに告ぐ、神の国のために、或は家、或は妻、或は兄弟、あるいは両親、あるいは子を棄つる者は、誰にても、³⁰今の時に数倍を受けまた後の世にて、永遠の生命を受けぬはなし。」（ルカ18・29～30）

こんな凄い言葉は躓きとなるよね。

「身内の者を棄てろ。我よりも何々を愛する者はふさわしからず、我が弟子に非ず」
なんて。この本当の意味は、

「とにかく、私との関係は絶対にしろ。そしたら、相對界は全部お前が逆に救っていくぞ」

ということなんです。キリストは、

「私を相手とする時に、他の事を相手にするな」

と。そうすると、棄てたと思つたものが、逆に今度は本当に拾い上げて皆救ってしまう。敵をも愛する力はそこから来る。どういう境遇であろうと、どういう身分であろうと、何歳であろうと、男であろうと女であろうと、福音の本当の世界は同じことです。差別はないですから。それが絶対という世界なんです。

私は、カトリックであろうがプロテスタントであろうが、どこへ行つたつて、話してくれと言われれば、どこへ行つたつてお話するよ。何も隔てないから。学校であろうと、どこであろうと。どこへ行つても、教会であろうと町の中であろうと、どこだつていい。電車の隣人でも。いたるところに天国を現じていく。その秘訣はキリストをうちに有^もつていないことです。皆さん一人びとりが、それができます。できないのは、キリストを有^もっていないからだ。

「自分の能力がどうだ」



と、そんなことではないですよ。

「何か知らんが、今日はひとつ次元の違ったところに私は入ったな。意識過剰だったな、幼児おさなごでなかったな」

と、それを感じていただかなくては。

私の讚美歌にもあるでしょ。幼児には国境はない。自然界にも国境はない。国境なんか作ってるのは人間だ。家の境が何センチ出たの引つ込んだのとくだらない。欲しければ、何センチでもやったらいい。死にはしないよ。どうしてまあ人間なんてものはそうなんだろうか。

「救いがたきは人なり」

という。本当にそうだ。キリストやお釈迦さんが出てきたわけです。

お釈迦さんの世界でも、一流の坊さんは凄い。私は無条件に敬意を表します。本ものは、人間の概念の世界ではない。

そういうことでもっていきましよう。そうしたらば、聖霊はもの凄い智慧も持っているから、あなた方は勉強したって、もう楽でしょうがないよ。何をしたって、楽しくてしょうがない。力が来てしょうがない。

私の和歌の二、三を読ませてください。（『詩歌集』16頁）

「わが神よともづな 纜ともづなを断ちて漕ぎ出でしこの舟路なり護り給ひね」

纜ともづなを断つて漕ぎ出でた、とは再び帰つて来ないということ。天国に向かつての、神の都に向かつての舟路であるということですよ。

「舳みよしべに砕けては散る波華なみはなとわがむら肝も砕けては散れ」

「祭司・学者・パリサイの徒にけな貶されしキリストのもとに我れは馳はせ往く」

この三つの句が一番先に出ているんだ。あなた方が読まれて、「これだ！」と言って、誰か葉書をくれるかと思つたら、誰もくれない。だから、昨日私はあんなこと言って悪かったけれども。

「先生、感じました」

と。共感しなかつたら、しょうがないんだ。

しかし、私は何も過去を言っているのではない。皆さんを本当に信じている。

「昨日の私は今日の私ではない、明日の私は今日の私ではない」

と言つて、我々は常に進み往く人です。過去の姿をみて、どうのこうのと、何のかんのと言う人は、これはサタンだ。常にその人の将来を見て、信じ込んで進んで行く。それが本当の愛です。聖霊はそのような霊です。だから、聖霊の世界にあると、何か知らんけれども、本当に光がうちから発してくることになる。本当の楽しさというのは、そういうところにある。

